

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 元 年 6 月 11 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16810

研究課題名(和文) 晋宋における寒門文人の文学活動の研究

研究課題名(英文) A study of literary activity in the Six Dynasties

研究代表者

渡邊 登紀(WATANABE, Toki)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：50632030

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、晋宋期に長江流域で活動した陶淵明・湛方生・鮑照の詩文を考察対象とするにあたり、これらの詩文のテキストの書誌学的調査および現存資料の限界をしばしば指摘される六朝詩文の新資料の発掘を行ってきた。国外では、上海図書館をはじめとした中国国家図書館(北京市)、復旦大学古籍研究所(上海市)、国立国家図書館(台北市)、国内では東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所において、多くの六朝期に関連する古籍の調査を行い、明・清・民国期における六朝詩文に関する古籍の流通状況の解明に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の学術的意義は、しばしば現存資料の限界性を指摘される六朝詩文について、鮑照の別集である『鮑氏集』をその例にとりあげて、当該書の流伝経路のを明らかにすると同時に、近年発見された新資料の資料的価値の検証を行ったことが第一に挙げられる。また、その社会的意義としては、デジタル時代の現代において、ややもすると軽視されがちな目録および目録学について、書誌学的見地から現代的意義を問い直したという点にあると言える。

研究成果の概要(英文)：The primary purpose of our assignment is to assemble TAO Yuan-Ming(陶淵明), ZHAN Fang-Sheng(湛方生) and BAO Zhao(鮑照)'s works, who are obscure poets in the Eastern Jin(東晋) and Liu-Song(劉宋) era. The second purpose is examine the social function of poems at the period from the end of the the Eastern Jin to the Liu-Song era.

研究分野：中国古典文学

キーワード：六朝 鮑照 湛方生 陶淵明

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者（渡邊）の研究「各種韻文の社会的機能に着目した東晋の文人・湛方生の詩文と長江流域文化に関する研究」（2014-2016 年度科学研究費補助金・若手 B）を踏まえながら、それをより発展させるものとして計画された。当該研究の研究目的は、黄河流域文化を基準とした中央集権的な従来の六朝文学史を、考察対象を詩以外の多種多彩な韻文形式に拡大し、各種韻文形式が具有する社会的機能の解明を通じて、長江流域文化との二元的な立場から再構築をすることにある。その概要は次に述べる通りである。

東晋末の文学の諸相を明らかにするために、陶淵明および彼と同時期に文学活動を行っていた無名の文人である湛方生に着目し、彼の詩文をもとに各種韻文形式が当時の社会で果たした社会的機能についての解明を図った。具体的には、湛方生詩文訳注の作成を進めると同時に、陶淵明の贈答詩をもとにし東晋期における四言詩と五言詩の社会的機能性の相違についての解明、さらに、劉宋文壇で名だたる文人に盛んに作られていた七夕詩にも着目し、東晋末・劉宋期にかけての文学変革の様相を明らかにした。

これらの考察を進めていくなかで、研究代表者（渡邊）が目指すところの、黄河流域文化と長江流域文化との二元的な立場からの六朝文学史の再構築を実現するには、考察対象となる詩文のテキストについて、その内部および周縁の考察すなわち文学的・社会文化史的考察のみならず、現在通行するテキストにいたるまでの編集過程（生成過程）についての解明、書誌学的・文献学的観点からのアプローチが不可欠であるという認識をもつに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、黄河流域文化を基準とした中央集権的な従来の六朝文学史を、考察対象を詩以外の多種多彩な韻文形式に拡大し、各種韻文形式が具有する社会的機能の解明を通じて、長江流域文化との二元的な立場から再構築をすることにある。ただし、限られた研究期間の中で、六朝の詩文の全てを対象とした考察を行うことは不可能なので、この研究期間においては、東晋末・劉宋期に文学活動を行っていた長江流域出身の寒門文人、陶淵明・湛方生・鮑照を中心とした詩文を考察の対象とする。

本研究の対象とするのは、まさに黄河流域文化と長江流域文化とが衝突し融合した時代、黄河流域の貴族たちが長江流域において亡命政権を確立した東晋王朝および劉宋王朝に仕えた、長江流域を出自とする文人たちの詩文である。長江流域出身の東晋の文人といえば陶淵明が特に有名であるが、裏を返せば、陶淵明の存在のみが傑出しており、陶淵明以外の当時の文人たちの文学活動の様相についてはあまり明らかにされていないとも言える。本研究はこの空白を明らかにすることで、黄河流域文化を基準とした中央集権的な従来の六朝文学史を長江流域文化との二元的な立場から再構築することを目指す。

研究代表者（渡邊）はかつて、論文「湛方生と官の文学 東晋末の文学活動」（『歴史文化社会論講座紀要』京都大学人間・環境学研究科、第 8 号、pp.1-16、2011 年 2 月、査読有）において、東晋期に生きた無名の寒門文人・湛方生の存在に着目し、彼の文学活動の様相およびその活動時期を明らかにしたが、湛方生は陶淵明とほぼ同時期に活躍した文人である。一方の鮑照は、陶淵明よりもおよそ半世紀あとに生まれ、劉宋に仕えた寒門文人であるから、当然ながら、陶淵明・湛方生の同時代人と見ることはできない。しかしながら、半世紀のタイムラグがあるとはいえ、鮑照の詩文は比較的まとまった形—現存資料の限界が指摘される六朝文学の中では最もまとまった形—で現在に伝わっていることから、同時代の文学活動の様相を知る手がかりが極めて少ない陶淵明や湛方生の文学にとって、ある程度の分量を備えた鮑照詩文はやや時代が遅れるとはいえ相補的な存在として位置づけられる。その鮑照の詩文について、それ自体への文学的・社会文化史的観点からアプローチを行うと同時に、鮑照詩文のテキストの編集過程および流過程を解明するための書誌学的・文献学的観点からのアプローチを行うことによって、東晋・劉宋期における長江流域独自の文学の形成および継承の過程を解明する見込みである。

本研究において解明を目指す問題は、次に示す 2 点である。

(a) 陶淵明・湛方生・鮑照の詩文に見える各種韻文形式の悉皆調査と解析

陶淵明・湛方生・鮑照の詩文に見える文学的・社会文化史的なアプローチ、多種多彩な韻文形式に着目し、同種の韻文形式を他の文人の詩文から収集し、当該韻文形式がどのような機会に、如何なる目的で用いられたものであるかをその機能性に注目して検討する。

(b) 上海図書館蔵の六朝書籍の善本調査による新資料の検証と発掘

研究代表者（渡邊）は「各種韻文の社会的機能に着目した東晋の文人・湛方生の詩文と長江流域文化に関する研究」（2014-2016 年度科学研究費補助金・若手 B）の研究期間に、上海図書館（中国）において、早急に善本調査を行うべき六朝関連書籍の存在を既に確認している。現地での転写作業および悉皆調査と解析を行い、当該書籍の資料的価値および六朝文学史における当該書籍の位置づけを解明する。

本研究では上記 2 点に取り組み、東晋・劉宋期における各種韻文形式の具有する社会的機能と長江流域との相関性および長江流域文化の独自性の解明を試みる。

3. 研究の方法

研究代表者（渡邊）は本研究を着手するにあたり、「2. 研究の目的」に挙げた「(a) 陶淵明・湛方生・鮑照の詩文に見える各種韻文形式の悉皆調査と解析」、「(b) 上海図書館蔵の六朝書籍の善本調査による新資料の検証と発掘」のうち、(a) の基礎的作業と (b) を位置づけ、(b) から優先的に行った。その具体的な研究の方法は次に述べる通りである。

(1) 調査

国内では東京大学東洋文化研究所、東洋文庫（いずれも東京都文京区）、京都大学附属図書館および人文科学研究所（いずれも京都市左京区）、静嘉堂文庫（東京都世田谷区）において予備調査を進め、国外では上海図書館（中国・上海市）のほか、中国国家図書館（中国・北京市）、国立国家図書館（台湾・台北市）、復旦大学古籍研究所（中国・上海市）において、善本調査を継続的に行った。調査対象とした書籍の資料的価値を検証するにあたって、現地では転写作業および悉皆調査を行い、国内でその解析を行った。限られた期間内で効率的に作業を進めるために、「中国典籍データベース」等の電子テキストデータベースも積極的に活用した。

(2) 具体的な研究の方法

以下に述べる四つの観点からアプローチを試みることにした。

上海図書館蔵『鮑氏集』孫毓修本の資料的価値の検証

土屋聡『六朝寒門文人鮑照の研究』（2013）は、上海図書館蔵『鮑氏集』孫毓修本に残されている書き入れが通行本『鮑氏集』の異本からの写しであることの可能性を示し、通行本『鮑氏集』に異本が存在したことを主張した。この土屋による研究およびその研究態度は、六朝詩文研究に新資料を提供したという点のみならず、唐代詩文研究に比して現存資料の絶対量に限界のある六朝詩文研究に新たな可能性を切り拓いたという点においても、今後の六朝詩文研究に大いに寄与するもので、その研究的意義は大きなものである。この土屋（2013）において、第三者による上海図書館蔵『鮑氏集』孫毓修本についての再検証がいまだ行われていなかったため、研究代表者（渡邊）が上海図書館での実地調査を行い、その検証を行った。

宋本『鮑氏集』の流传状況の解明

鮑照の別集として最善のテキストとされる宋本『鮑氏集』とその写しである毛斧季校宋本等について、明末清初から清末民国初期にかけての流传状況の解明を行った。清代の各種蔵書目録の悉皆調査を行ったほか、(1) に挙げた国内外の諸図書館において、国内外に残る各種『鮑氏集』の書誌学的・文献学的調査を行い、現在は失われてしまった宋本『鮑氏集』内のテキストがいかなる経路をたどって伝存されてきたかを追跡すると同時に、鮑照詩文のテキスト校勘を行った。

六朝関連書籍の新資料の発掘

上記に並行しながら、国内外の諸図書館において、資料の限界がしばしば指摘される六朝文学について、その新資料の発掘を試みた。

陶淵明・湛方生・鮑照らの詩文に見える各種韻文形式の悉皆調査と解析

研究代表者（渡邊）が従事した「各種韻文の社会的機能に着目した東晋の文人・湛方生の詩文と長江流域文化に関する研究」（2014-2016 年度科学研究費補助金・若手 B）で取り上げた、劉宋文壇を中心とした七夕詩の流行について、引き続き悉皆調査を行った。

ここに述べた ～ はいずれも、「2. 研究の目的」に挙げた「(b) 上海図書館蔵の六朝書籍の善本調査による新資料の検証と発掘」に相当するもので、(a) 陶淵明・湛方生・鮑照の詩文に見える各種韻文形式の悉皆調査と解析」に相当するものである。当初の計画では、(b) を行った後に (a) を行うことを予定していたが、(b) の研究を進めていくなかでその占める割合が大きくなり、(b) の研究を遂行するために (a) の研究の占める割合を縮小するという計画の変更を行った。

4. 研究成果

本研究における研究成果は以下に述べる通りである。

上海図書館蔵『鮑氏集』孫毓修本の資料的価値の検証

土屋（2013）によって発見された上海図書館蔵『鮑氏集』孫毓修本についての再検証を行った。この孫毓修本について、鮑照の別集における最善のテキストとされる宋本『鮑氏集』の写しである毛斧季校宋本の異本の写しであるという説を土屋（2013）は提唱した。しかし、本研究では、清末民国期の毛斧季校宋本の流传状況について、商務印書館を牽引した張元済らの書簡および日記等の記述、さらに孫毓修本に見える書き入れをもとに検証したところ、孫毓修本は毛斧季校宋本の異本に拠ったという可能性は見込めず、商務印書館で『四部叢刊』刊行の実務に携わっていた孫毓修が、商務印書館に収蔵されていた毛斧季校宋本をもとに自ら作成した校本であったと結論づけた。その成果は、渡邊登記「四部叢刊本『鮑氏集』について」（『中国語中国文化』日本大学文理学部、査読有、第 15 号、2018、pp.56-82、）として論文にまとめられた。

宋本『鮑氏集』の流传状況の解明

鮑照の別集における最善のテキストとされる宋本『鮑氏集』は、文献上では明末まで現存し

ていたことが確認されるが、その後に失われ、清以降、宋本『鮑氏集』の校本である毛斧季校宋本および影抄本である毛斧季影抄宋本、すなわち明代の蔵書家・毛斧季による宋本『鮑氏集』の写しが、鮑照の別集における善本として扱われてきた。研究代表者は、明末から民国期にかけての蔵書家間における毛斧季校宋本の流伝の経路を追跡した。その成果の一つが、にも挙げた渡邊登紀「四部叢刊本『鮑氏集』について」(『中国語中国文化』日本大学文理学部、査読有、第15号、2018、pp.56-82、)で、清末民国期における毛斧季校宋本の流伝状況について述べている。明末から清初中葉における毛斧季校宋本の流伝状況については、すでに調査は完了済みであり、現在はその成果を公表するための準備を進めているところである。

六朝関連書籍の新資料の発掘

現時点で報告できる新資料の存在は確証にはいたっていないが、上海図書館をはじめとした諸図書館での新資料の発掘とその検証は、引き続き行っていく必要がある。一方、本研究が六朝文学に書誌学的・文献学的アプローチを試みていることを承けて、『六朝学会報』から書誌学・文献学の概論書である程千帆・徐有富(著)向嶋成美・樋口泰裕・渡邊大(訳)『中国古典学への招待 目録学入門』(研文出版、2016)についての書評を依頼され、渡邊登紀「書評：程千帆・徐有富(著)向嶋成美・樋口泰裕・渡邊大(訳)『中国古典学への招待 目録学入門』」(『六朝学会報』20集、2019、pp.107-117)として掲載された。この書評も、本研究の成果の一つとして数えられる。

陶淵明・湛方生・鮑照らの詩文に見える各種韻文形式の悉皆調査と解析

「各種韻文の社会的機能に着目した東晋の文人・湛方生の詩文と長江流域文化に関する研究」(2014-2016年度科学研究費補助金・若手B)から継続して、劉宋文壇を中心とした七夕詩の流行についての考察を行った。現在はその成果を公表するための準備を進めているところであり、まもなく公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

(1) 渡邊登紀、四部叢刊本『鮑氏集』について、『中国語中国文化』日本大学文理学部、査読有、第15号、2018、pp.56-82、

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：堂園 淑子

ローマ字氏名：(DOUZONO, Yoshiko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。